

研 究 紀 要

美 術 工 芸 部 会

実践発表 1

「占星術的観点からの西洋美術史」

青森県立八戸高等学校 坂 本 智 史 …… 1

実践発表 2

「授業細分化の試み～版画指導の見直し～」

青森県立八戸工業高等学校 宮 本 紘 子 …… 3

報告 1

「令和 7 年度高等学校各教科等担当主事連絡協議会より」

青森県立黒石高等学校 佐 藤 広 野 …… 5

報告 2-1

「八戸市美術館 『学校連携プロジェクト』活動報告」

青森県立八戸東高等学校 清 野 恵 …… 6

報告 2-2

「八戸市美術館 学校連携プロジェクト『美術館新聞部』活動報告」

青森県立八戸工業高等学校 宮 本 紘 子 …… 7

講演

「八戸市の文化のまちづくり」

八戸市観光文化スポーツ部 工 藤 俊 憲 …… 8

部会の動き …… 10

研究テーマ …… 11

紀要編集委員 柁木 富美子（青森県立青森西高等学校）

「占星術的観点からの西洋美術史」

発表者 青森県立八戸高等学校 坂 本 智 史

1 占星術とは

占星術は数千年かけて完成し、いまなお天文学的発見とともに進化を続けているジャンルである。しかし一ジャンルというよりも本来は人類にとっての最大の精神母体あるいは尺度と言ったほうが正確であり、芸術・科学の大本であるとも言える。占星術は未来の教育科目と言っても過言ではなく、個人鑑定でも、世界を分析する上でも占星術は驚くべき視点を提供してくれる。西洋美術史の二千年を見ると宗教芸術から個人の視点による芸術へと移行している。この移行の占星術的根拠は、二千年単位での魚座時代から水瓶座時代への推移が関連しているという見方ができる。

2 魚座時代から水瓶座時代へ

天宮 12 星座の中で魚座と水瓶座の二つの星座は、二千年単位の歴史を考える上で重要である。西暦はキリスト誕生を基準にしているが、その占星術的根拠は地球の歳差運動とともに生じる春分点の移動である。春分点は二万六千年ほどで 12 星座を一周し、星座を改めながら、時代精神を変えてゆく。キリスト誕生とともに始まった魚座時代は宗教を基盤としており、新たな水瓶座時代は個性による発明発見が尊重される。2019 年からの世界的感染症問題による根本的な社会変化は、占星術上では魚座時代から水瓶座時代へ移行する際の激動であったのかもしれない。魚座時代の終末は魚座的なものが海王星によって極端に強調され、人々は旧来の魚座的「信じる」姿勢を時代によって試される形となったのではないだろうか。目に見えないものを信じて全ての人が、例外なくマスクをした時期は魚座に海王星が滞在し、宗教的エネルギーが強まっていた。

3 時代星座の移り変わり

| | | |
|-------|-----------------------|-------------------------|
| 牡牛座時代 | 紀元前 4000 年～紀元前 2000 年 | 土元素 (エジプトの黄金芸術 農業の発展) |
| 牡羊座時代 | 紀元前 2000 年～紀元元年 | 火元素 (羊飼いのモーゼ ギリシャ彫刻 鉄器) |
| 魚座時代 | 紀元元年 ～紀元 2000 年 | 水元素 (キリスト教 宗教美術 騎士道) |
| 水瓶座時代 | 紀元 2000 年 ～紀元 4000 年 | 風元素 (ニューエイジ文化 民衆の情報革命) |

4 美術史の占星術的解釈 天王星発見と市民革命

占星術は星座とそこを運行する天体の組み合わせから時代の課題を知ろうとする。天文学上の発見は世界そのものに影響を与える。1781 年にイギリスで天王星が発見された。それ以前は水瓶座の支配星は土星であったが現在は天王星となっている。この革命の星が発見される前後は世界が天災や革命で激動している。

1783 年にアイスランドのラキ山と日本の岩木山が噴火して大飢饉をもたらし、1789 年にフランス革命が起こり、革命家ナポレオンが出現している。美術史上ではアンゲルの『王座のナポレオン』やドラクロワの『民衆を導く自由の女神』が革命期の絵画表現として分かりやすい。水瓶座には「自由・平等・博愛」というキーワードがあり、フランス革命の標語そのものである。1762 年に亡くなった八戸の思想家、安藤昌益は世界で初めて人間は皆平等であると述べており、この時代における未来予言者にも見えてくる。



図 1 フランス革命とナポレオン時代に生まれた新古典主義とロマン主義
(スライド資料より)

5 西洋美術史における水瓶座的な意識変化

近代美術の萌芽となっているドラクロワやアングルはオリエント趣味を作品に持ち込み、当時の西洋人の意識が中東や中国、いずれは日本へ向かうことが示唆されている。天王星発見は産業革命の時期とも重なっており、科学の力が宗教にとって代わるような時代となり、神話や宗教を描くことが陳腐化していった。保守的なアカデミーから飛び出して史上初の個展を開いたとされるクールベは写実主義を掲げ、見たこともない天使は描かないと宣言し、その姿勢は自然を好むバルビゾン派に共有され、後の印象派とジャポニズムにも繋がっていく。権威よりも庶民目線が芸術を変革していく中で日本美術の影響力は甚大であり、とくに葛飾北斎はセザンヌやゴッホを感化したと言われている。

6 海王星発見と神秘主義

宗教的題材が時代遅れになると平行して、個人の内面に生じる幻想世界を描く画家達が現れてくる。後期印象派のルドンや象徴主義の活躍は、1846年フランスにおける海王星発見の時期と重なる。海王星は夢や無意識の天体であり、キリスト教とは異なる神秘思想や哲学、あるいは心理学が登場してくる。個人の内面を掘り下げることで見える精神世界の探求は後のシュルレアリスムに継承されていく。

7 冥王星発見と破壊的創造

1930年にアメリカで冥王星が発見され歓迎されるが、この星の意味は「死と再生」であり、文字通り世界は二つの大戦によって粉々に破壊され再生していく。この時代を最も鮮烈に体現した画家はピカソであろう。青の時代から戦争の非人間性を描いたゲルニカまで一貫して冥王星的な死と再生というテーマが相応しい。シュルレアリスムは、冥王星発見前後から活動が始まっており、日常の事物をバラバラに配置するデペイズマンやバラバラな素材を貼り付けて構成するコラージュなどは破壊と創造をもたらす冥王星の働きと捉えてならない。ダリは生涯、シュルレアリストだった画家であり、戦後にアメリカモダンアートが中心となって伝統的具象芸術の危機をもたらすが、ダリは今日に至る新たな庶民的具象表現の手本となっていく。



図 2 世界大戦時代に生まれた破壊的芸術

(スライド資料より)

8 高校生の反応

初めて西洋美術と占星術を解説する授業を終えた時に、生徒達から拍手が起こった。年度終わりに感想を集めると占星術に興味をもった生徒達が何人か居た。一見無関係な事象が宇宙を介して繋がる驚きを共有できたのだと思う。難しく見える内容であるが、生徒達は教科書に無い情報に飢えていることが見てとれる。誰しも子供時代に漠然と宇宙への憧れを抱くが、高度な科学的専門分野しか宇宙を扱えないので素人は関心を無くしてしまいがちである。しかし、宇宙は遠く離れた彼方にあるものではなく、私たち全ての内部に小宇宙として存在している事実を占星術は教えてくれる。占星術は固定された法則ではなく、各自が生きた思考と直感を駆使して流動的に答えを出さざるを得ない。かつて人々は季節と天体に思いを馳せながら文化を創っていった星々への興味と愛着を思い起こすことが文化力復活に繋がるのかもしれない。

実践発表 2

「授業細分化の試み～版画指導の見直し～」

発表者 青森県立八戸工業高等学校 宮 本 紘 子

1 八戸工業高校に勤務して

本校は工業系の専門高校であり、生徒の約9割が男子である。美術の授業においては、表現活動そのものに苦手意識を持つ生徒が少なくない。絵が描けない、色を扱うことに不安があるといった声は毎年のように聞かれる。そのため、授業では「うまく描けるかどうか」よりも「まず手を動かしてみる」「やってみたら意外とできた」という体験を重ね、少しでも意欲や興味につながられるよう配慮してきた。

芸術科の開設状況は、美術と書道の二科目で、音楽が開設されているという珍しいパターンである。赴任当初は、工業高校の特色を生かした授業を構想した。工業の専門教科と美術を結びつけ、製図やデザインの要素を取り入れることで相乗効果が得られるのではないかと考えた。しかし、実際に授業を進めてみると、専門教科では「正確さを重視したものづくり」を学んでいるせいか、逆に美術の時間では、自由に発想・構想したい生徒が多いように感じた。以来、美術の授業は「自由な創造の場」として位置づけ、生徒が専門教科とは異なる自分の表現を試す場とした方が、意義があると考えられるようになった。

2 授業細分化の試み

工業高校の男子生徒を対象とした美術の授業は、ユーモアあふれる作品が多く見られる一方で、集中力が続かない生徒も少なくない。発想が得意でないことが多く、また難易度が高かったり、工程が複雑だと意欲を失いやすく、作業を途中であきらめてしまう傾向がある。学級の雰囲気が落ち着かなくなりやすい点も特徴として挙げられる。こうした課題に対応するため、私は授業の細分化（スモールステップ化）を試みた。活動を小さく区切ることで見通しを持たせ、達成感を積み重ねられるように工夫している。

時間の細分化としては、1コマ50分の中で「5分説明→20分制作→振り返り」などの目安をあらかじめ提示し、板書で明示するようにした。生徒は「今日はここまでやればいい」という見通しを持つことで安心して取り組み、制作への取り組みが早くなった。作品の細分化としては、作品サイズを従来よりも小さく設定した。大きな画面に向かうと最初から構えてしまい、描き出す前に気持ちが折れてしまう生徒も少なくない。しかし、小型化することで「これならやれる」と感じやすくなり、やり直しや修正もしやすい。失敗を恐れずに挑戦できる授業づくりを心がけた。

当初は「小さい作品では満足感が得られないのではないか」という不安もあったが、結果的には一つの題材にかける時間が短縮されたことで、より多くの技法や題材に触れることができ、経験の幅を広げることができた。授業全体にも、制作に向かう雰囲気が生まれてくるようになった。

3 版画指導の見直し

版画の授業を続けてきた理由は三つある。第一に、絵が苦手な生徒でも版画で活躍する姿が見られること。第二に、伝統的な版画技法に触れることで、ものづくりの楽しさや奥深さを体験できること。そして第三に、試し刷りを重ねながら少しずつ完成に向かう過程を通して、達成感や工夫する喜びを味わえることである。本校でも赴任してから7年間版、画の授業では、私自身も少しずつ試行錯誤と見直しを重ねてきた。

1年目は伝統的な多色刷り木版に挑戦したが、下絵を板に移す作業や彫りの工程でつまずき、授業が停滞することが多かった。彫る作業に多くの時間がかかり、完成に至らない生徒も少なくなかった。結果として、多くの生徒が失敗と感じ、版画表現の面白さを味わうことなく授業を終えることになってしまった。

2年目はその反省を生かし、「手のひらサイズの版画を自由に刷り、コラージュして1枚の作品に仕上げる」課題を考案した。材料もSP版に変更し、柔かく彫りやすくなった。さらに、見当を用いず、自由な重ね刷りを可能にしたことで、作品のズレを気にすることなく、偶然の重なりや色の響き合いを楽しめるようになった。完成した版画を切り貼りして構成する過程では、試行錯誤を重ねながら構図を工夫する生徒の姿も見られた。

しかし、3～4年目になると、生徒は一度刷っただけで満足してしまい、重ね刷りや構成の工夫に至らないことが多かった。説明だけでは技法の面白さが伝わりにくく、試し刷りの回数も少ないまま授業が終わることが課題となった。5年目は、授業見直しの期間とし、版画は実施しなかった。



図1 版画のコラージュの実践（R2）

そして6年目の版画の授業では、工程をさらに細分化した。

- (1) 小さな絵を一つ彫る。
- (2) 色違いで刷ってみる。
- (3) 重ね刷りに挑戦する。
- (4) 余裕があれば二つ目の絵に取り組む。

という段階を設定することで、「まずは絵を1枚刷ってみよう」という目標に集中できるようにした。その結果、試し刷りを行いながらさらに工夫を加える生徒が増え、友人同士で版を交換してコラボレーション作品を制作する姿も見られた。授業の中に自然な交流が生まれ、偶然性を楽しみながら版画の魅力に気づく生徒が出てきたことはひとつの成果であった。



図2 色違いや、重ね刷りに挑戦中（R6）

4 まとめ・今後の課題

本校での実践を振り返ると、題材や時間の設定を、生徒の実態に合わせて計画することの重要性を強く実感する。特に、工程の細分化によって「できた」という実感を積み重ねさせることは、表現に苦手意識をもつ生徒にとって有効である。また、版画の授業については「版＝印刷」という観点からの再考が必要だと感じている。伝統的な技法の学習に加え、現代のグラフィックアーツやデザイン、印刷文化との関連から版画を捉えることで、より広く現代的な意義を持たせることができるだろう。今後は、従来の技法学習の枠を超え、生徒が「自分の表現」「生活に根ざした表現」として版画に取り組める授業実践を目指していきたい。

報告 1

「令和 7 年度高等学校各教科等担当指導主事連絡協議会より」

報告者 青森県立黒石高等学校 佐藤 広野

○「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けて

(文部科学省初等中等教育局教科調査官 平田 朝一氏より)

1 「主体的・対話的で深い学び」とは

(1) 主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる。

(2) 対話的な学び

子供同士の協議、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める。

(3) 深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう。

2 授業改善の場面設定(授業全体を通じて設定すべき場面)

(1) 見通しを立てたり学習したことを振り返ったりすることで自身の変容を自覚できる場面

(2) 対話によって自分の考えなどを広めたり深めたりする場面

(3) 生徒が考える場面と教師が教える場面をどう組み立てるか

3 言語活動の充実

アイディアスケッチなどで構想を練ったり、言葉などで考えを整理したりすることや、作品について批評し合う活動を取り入れる ⇒ 自他とふれあう中で新しい見方に気づき、新たな価値を見出すことにつながる。

4 目標の確認

美術の幅広い創造活動を通して、造形的な見方・考え方(※)を働かせ、美的体験を重ね、生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

※造形的な見方・考え方…①感性や想像力を働かせる ②対象や事象を造形的な視点で捉える ③自分としての意味や価値をつくりだす

目標を確認し、「何を学ばせるのか」、「生徒のどのような資質・能力を育成すべきか」について明確にビジョンを持つこと。これにより評価の際のビジョンも明確になっていく。

5 〔共通事項〕の視点で授業を考える

共通事項は表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力を示したものであり、造形的な視点を豊かにするために必要な知識として表現及び鑑賞の各活動に適切に位置付け、指導計画を作成する必要がある。

6 「A表現」及び「B鑑賞」相互の関連を図る

発想や構想と鑑賞の学習の双方に働く中心となる考えを軸にそれぞれの資質・能力を高められるようにする。
例) パッケージデザインの授業ならば…

鑑 身近なパッケージデザインの鑑賞 ⇒ 鑑 相互に考えたことを発表 ⇒ 表 アイディアスケッチ
⇒ 鑑 アイディアスケッチに対する相互の感想を発表 ⇒ 表 様々な素材に触れさせながら制作 ⇒ 鑑 完成作品鑑賞

7 生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる

学習指導要領の柱書きとして掲げられた文言。これらを達成するために主体的・対話的で深い学びの実践に基づき授業改善に努めてほしい。

「八戸市美術館『学校連携プロジェクト』活動報告」

報告者 青森県立八戸東高等学校 清 野 恵

1 はじめに

八戸市立美術館ホワイトキューブで、八戸市美術館学校連携プロジェクト活動の一環で、「みんなでじっくり鑑賞ナビ」を実施した。内容は、展覧会『展示室の冒険』（2024年4月～6月）でワークシートを使って、鑑賞者の考えを持ち寄り、さまざまな見方を踏まえて鑑賞をした。参加者 11 名で、美術館をハブとした学びの新しい形やアートファームの取り組みへの参加と、教室ではない空間、集団で教育現場の要素を入れた対話鑑賞をすることでどのような反応があるのか。そこで得られたことを授業へフィードバックすることをねらいとした。

2 対話鑑賞の様子



図2 鑑賞者と一緒に考える様子

参加者は未就学児～60代の県内外の11人であり、「美術館に行ってみて何かやっていたら参加してみよう」という意識や、日頃から美術館側の参加しやすいシステムづくりを実感した。鑑賞会ではワークシートや付箋を活用し、初めて顔を合わせた集団であっても、発言しやすい仕組みをつくった。作品に対して①どこ？という答えやすい質問②選択支の中から選ぶ質問③感覚や感情を言語化し言葉に出す質問。の3ステップで構成し、展示エリアを巡った。



図1 質問しながらの鑑賞の様子

授業の要素を入れた対話鑑賞に該当する部分は、ワークシートと付箋（授業ではタブレットで「ふきだしくん」を活用）を使用。流れと趣旨を説明。意見からさらに意見を引き出す。自由鑑賞時間をとる。参加者の意見を紹介。1作品を全員で対話鑑賞。全体を振り返り、多様な物の見方、考え方に触れながら鑑賞の良さをまとめる等である。およそ60分の時間内で、子どものまっすぐな発言にはっとしたり、大人の持つ語彙力に、新たな言語化の手段を得たりと、感性のやりとりも垣間見えた。展示の図録編纂や展示担当者である学芸員の協力があつたため、作品の情報や美術的な観点からの雑談等も織り交ぜながら進行することができ、参加者の年代に幅があつても、それぞれに発見や感性の交流が図れた様子であり、参加者全てのアンケート回答が「とても満足」であつた。

3 まとめ

多様な人間がひとつの作品に向かい合ったときに、作品を観ようとして見ることの楽しさや、全ての鑑賞者が持つ『観る力』、『美術館という空間』と『作品の持つ力』の化学反応に、新たな学びの可能性を感じた。何よりの大きな学びは、自らの眼でものを観て、思考し、手段を選んでアウトプットする行為を鑑みると、『鑑賞』活動が一步個人の外側に出ると、素晴らしい『表現』活動に転じるということであつた。

開かれた存在の新しい美術館と連携し、これからの社会を見据えた取り組みに参加することで、普遍性と流行を実感することが出来た。これらのことを教科内で共有し、人間と美術の本質的な関係を授業にフィードバックしていくことが、AI化が急速に進む現代の教育の中で重要な役割を担うと感じた。そう感じた一番の手応えは、作品を鑑賞している時の参加者の真剣な『眼』であつた。



図3 1枚の絵の前で対話鑑賞する様子

「八戸市美術館 学校連携プロジェクト『美術館新聞部』活動報告」

報告者 青森県立八戸工業高等学校 宮 本 紘 子

1 学校連携プロジェクトについて

八戸市美術館「学校連携プロジェクト」は、美術館再開館に先立つ令和2年より活動を行っている。メンバーは小・中・高校の教員、美術や教育の専門家、美術館学芸員、学校連携コーディネーターで構成されている。学校や美術館といった立場を超えて協働することで、美術教育の課題を共有し、改善につなげるとともに、児童生徒が図工・美術に親しみ、表現を通して自分なりの答えを見つける力を育むことを目的としている。そのための情報交換の場としても、本プロジェクトは有意義な役割を果たしている。

2 美術館新聞部の活動

私は令和3年度より「美術館新聞部」の活動に参加している。活動の中心は本校美術部員であり、そこに地域の小・中学生を迎え入れ、美術や八戸に関する話題を新聞という形で発信するものである。小・中学生は、自分の感じたことを文章やイラストでのびのびと表現し、高校生はそのサポートを担う。また高校生にとっては、新聞作成を通じて美術に関する知見を広げることができ、日頃の制作活動にも好影響を及ぼしている。

活動は令和3年度に第1号を発行して以来、第4号（令和6年度）まで継続している。単発で終わらず、持続可能な取り組みとすることを目標としてきた。活動の流れはほぼ定着しており、11月から12月にかけて小・中学生メンバーの募集と高校生による記事内容の検討を行う。並行して、高校生は必要に応じて取材を行う。冬休みの1月には、小・中学生と高校生が美術館に集まり、取材やイラスト制作などの共同活動を行う。活動は2日間に分け、半日ずつのワークショップ形式で進めている。小・中学生は毎年「4コマ漫画」を担当し、高校生と一緒に作品を作り上げる。この取材や記録をもとに、1月から2月にかけて高校生が記事を執筆し、紙面を仕上げる。

3 まとめと今後の展望

持続可能な活動とするために、新聞づくりの過程が生徒自身の制作活動に還元できる学びとなり、「やってよかった」と思える経験となることを大切にしている。美術部員の本分である、作品制作の時間をなるべく削らないことにも気をつけている。そのために、準備・取材・制作の流れを毎年のパターンとして定着させ、無理のないスケジュールを工夫してきた。こうした仕組み化によって活動の見通しが持てるようになり、安心して取り組むことができていく。小さな規模であっても継続していくことが、美術文化を地域に根付かせる契機となると考えている。そして、これら学校連携プロジェクトの活動が、部活動を含めた高校の美術教育の活性化、さらには小中学校の図工・美術教育の活性化へと広がっていくことを願っている。



図1 令和6年度発行 美術館新聞部 『とれたて!すまあ〜と!』第4号 *一部加工しています

「八戸市の文化のまちづくり」

講師 八戸市観光文化スポーツ部長 工 藤 俊 憲 氏

1 はじめに

1985 年当時、現アニメーション監督の庵野秀明氏の学生時代の活動に影響を受け、高校のアニメーション愛好会で特撮映画の創作活動を行っていた。本編は 30 分程度で模型や着ぐるみを手作りし、撮影も学校や近隣の空き地で行った。当時は 8 ミリフィルムで撮影しており、ミニチュアの街並みをスタッフで作成したり、特殊効果の光線は監督が直接フィルムにサンポールを使って描き、花火を使って爆発を表現したりなど仲間で協力し、創意工夫しながら制作していた。

八戸市には、「三社大祭」、「えんぶり」、「館鼻岸壁朝市」、「みろく横町」、「縄文遺跡群」などといった文化的バックボーンがある。最近のトピックとしては、三陸復興国立公園「みちのく潮風トレイル」は 5 周年を迎え、ドイツやアメリカの方々など外国人の方も観光に来るようになっている。

2 はちのへ文化のまちづくりプラン

文化のまちづくりプランは 3 年前に策定した。6 つの施策の取組を進め、企業の参画も含めたプランを策定した。この前段として、2006 年に多文化都市八戸推進会議が設置されているが、八戸市では、多様で寛容な文化体験ができることを「多文化」と位置づけし、振興していこうというのが 20 年前くらいから始まっている。

2011 年、八戸ポータルミュージアム「はっち」がオープンしたが、この取組も文化のまちづくりビジョンの策定へとつながっている。

3 アートなまちづくり（八戸市の場合）

「アートなまちづくり」は、まちに作品展示をするなど等の手法もあるが、八戸市では新しい価値を生み出す「過程」を大事にしようと考えている。

「はっち」の理念もこれと同じであり、様々な市民の活動が展開されることのほか、地域資源（例えば、種差海岸など）の魅力を市民や観光客に広めていこうというものである。これは、簡単に名所の写真を掲示して「これ、いいですね」

というのではなく、アーティストインレジデンス事業（AIR）により、アーティストのフィルターを通して八戸の地域資源を解釈し、作品にすることで、市民や観光客に新たな気づきを与える、という事業も行っている。また、このプロセスの中では「人を巻き込む」ことを大切にしており、アーティストが自由に作品を制作するだけの AIR ではなく、必ずその過程に市民を巻き込むことができるアーティストを選定している。

- ・「南郷アート」…南郷の面白いところをアートで掘り起こしてみようというプロジェクト。
- ・「工場アート」…工場夜景が大変綺麗な場所である。「八戸工場大学」で文化推進・展開をしている。
- ・「まちぐみ」…平成 25 年スタート。「まちぐみ」本当は「まちぐ（る）み」。まちぐるみで色々なことを起こそうという意味である。八戸に移住してきたアーティストの山本耕一郎氏が組長として活躍。アートをベースに若い人たちを中心としたゆるいつながりをつくることが関心を呼び、全国からも注目されている。

4 中心地街地に複数の文化・スポーツ系公共施設を設置しているワケ

八戸市の中心街は、藩政時代の八戸城があった城下町である。以来、市民にとってここが市の中心地だという共通理解があるエリアである。全国的に地方の中心街はシャッター街となり勢いが無くなり、国も危惧していたが、平成 20 年、八戸市は中心市街活性化基本計画を全国 2 番目に策定した。今までの中心街は商業メインのエリアだったが、この計画では、市民が来街する目的を増やすことを第一に考え、はっち、美術館、ブックセンター、国内で三カ所目の屋根付きのオーバルリンクである YS アリーナなど、中心街に集まる場所を造ることで新たな賑わいを創出している。

八戸市
文化のまちづくりプラン
施策 1 ふれる・ふかめる
～文化芸術に親しむ～
施策 2 つくる・いどむ
～新たな創造への取組～
施策 3 まじる・まざる
～文化芸術による共生～
施策 4 のこす・いかす
～伝統の継承と活用～
施策 5 つなぐ・ささえる
～担う人、支える人の確保・育成～
施策 6 あつめる・ひろめる
～連携のソフトインフラ～

図 1 文化のまちづくりプラン

このことはまず、行政が率先して中心街を変えていくという姿勢を示し、次いで民間資本の投下を促していくものであり、近年では「チーノ」の跡地の十三日町にマンションとホテル、商業施設の建設が進んでいる。行政運営としてはかなり思い切った施策ではあるが、まちづくりの考え方からすると、全国から注目されていることもあり、50年、100年先を見据えた時、永遠にこの場所は確保されるという意味で正解なのではと考えている。

5 はっち、ブックセンター、美術館

「はっち」は、開館からちょうど1か月目に東日本大震災で被災したが、発電設備があったため、中心街のホテル等から避難した人達が殺到し、臨時避難所になった。開館当初は館の主旨や内容が伝わらず、市民から歓迎された施設ではなかったが、震災における貢献により、市民の方の見る目が変わってきた。

「はっち」は文化観光交流施設であり、観光案内のほか、貸館により表現や展示する場でもあり、はっちが自ら企画した公演も行われている。4階には子育て支援を行う「こどもはっち」があり、子育て相談やパパ、ママの交流会を開いている。

「ブックセンター」は、読書好きだった前市長のトップダウンで開設されたが、結果的には大正解だったと考えている。全国の地方の書店はどんどん減少しており、書店がない自治体も増加している。八戸市は、まだ民間書店はあるが、いろんな本を読む体験を、知的な体験を、学習にも使え人生を豊かにする本に出会える体験を増やしたいという思いから、地元書店とも連携した公営書店を全国に先駆けて作った。本に親しむ人、物書きする人を増やす取り組みをおこなっており、読書会、大学生、高校生によるブックハンティングなど、色々な出会いを誘発するような仕掛けを作っている。

「美術館」について、八戸市美術館は「学び」の美術館である。現在の美術館の改築に向けて、当時の部長から何かアイデアを出してくれと言われ、考えたことがある。美術を学んでいた学生の時、様々な作品や映画を見てどうやって作っているんだ？と考えていた。人は作品を見てすごいなと感じると思うが、どうやって表現しているのかということも同時に感じるのではないかと。「表現の仕方がわかれば、もしかしたら「見る側」から「作る側」に回れるのではないかと」そう思った。いろんな技巧を学ぶことは価値あることではないだろうか。この美術館は単なる鑑賞だけでなく、自らが表現者になる学びを意識してやったらどうか、とアイデアを出した。私の意見だけが採用されたわけではないと思うが、八戸市美術館は第4世代の美術館として、自分が単なる鑑賞するだけでなく、同時に表現する、体験することができるような美術館を目指している。その取り組みの中でも、中学校、高校の先生の繋がりが作られ、美術館スタッフが学校での出張講座を行うなど学校連携事業はすごく良い取り組みであると感じている。

6 パブリック（公共）空間をさまざまに活用する

文化振興にあたっては、その継続性を担保するためにも文化と経済の結びつきや、民間との連携が大切である。市の文化創造推進課では、「八戸アート広場事業」を展開しており、アート活動をしている人を繋ぐ場として3か月に1回程度開催している。アート活動に興味がある方、支援したい方の相互理解とつながる場所として、例えば、書道、フラワーアートが結びついて一緒に美術館で展示が行われたりもしている。一方で課題もあり、スポンサーと当事者との幅広いつながりがまだできていない現状がある。

オープンでパブリックなスペースとしての活用として、「はっち」には勉強している中学生、高校生がたくさんいる。テスト前には多くの生徒達が勉強する場になるが、邪魔に扱っていない。公共スペースをどのように使うべきか市民に投げかけている。本棚を見ながらゆっくり時間を過ごすなど、公共のスペースを公共のイベント以外の時間帯に上手く利用して欲しい。

また、市の中心街は、商業だけではなくっており、文化をベースにして自由に使って欲しいと考えている。パブリックなスペースであっても、活動と交流を作れるオープンスペースで、個人が思い思いに使うことで、街中の活性化に繋がっていけばいい。美術館だけ、「はっち」だけ、「ブックセンター」だけではできない。民間の取り組みと一緒にやる、参加することでまちづくりが「自分ゴト」になってくると思う。



図2 「はっち」で学習する高校生
取材（紀要担当）

部 会 の 動 き

美術工芸部会

1. 5月23日(金) 総 会

○会場：青森西高等学校（青森市）

- (1) 令和6年度 庶務報告
- (2) 監査報告
- (3) 令和6年度 決算報告
- (4) 役員改選
- (5) 令和7年度 事業計画(案) 審議
- (6) 令和7年度 予算(案) 審議

2. 5月22日(木) 事務局長会議

○会場：青森県総合社会教育センター（青森市）

出席：佐藤（事務局・黒石）

3. 8月19日(火)～20日(水) 総会・研究大会

○会場 八戸市美術館（八戸市）

- ・総会 令和8年度研究大会計画書(案) 審議
- ・研究大会 研究テーマ『地域に根ざした文化活動を目指して』
 - 実践発表1 「占星術的観点からの西洋美術史」
青森県立八戸高等学校 臨時講師 坂 本 智 史
 - 実践発表2 「授業細分化の試み ― 版画指導の見直し」
青森県立八戸工業高等学校 教諭 宮 本 紘 子
 - 報 告 「令和7年度高等学校各教科等担当指導主事連絡協議会より」
青森県立黒石高等学校 教諭 佐 藤 広 野
 - 報 告 「八戸市美術館『学校連携プロジェクト』活動報告」
県南地区会員
 - 講 演 「八戸市の文化のまちづくり」
八戸市観光文化スポーツ部 部長 工 藤 俊 憲 氏
 - 散 策 中心街文化施設 散策
青森県立八戸工業高等学校 教諭 宮 本 紘 子
(八戸ポータルミュージアム「はっち」,
八戸まちなか広場「マチニワ」,「八戸ブックセンター」)

・参加者 部会員15名

4. 8月～9月 研究紀要原稿の校正と編集

担当：柁木（青森西）

5. 8月21日(木)～22日(金)

第62回全国高等学校美術、工芸教育研究大会〈2025新潟大会〉

○大会テーマ 「萌えよ!新潟『源流,そして実りへ〜美術,工芸教育の深化と広がり〜』

参加：佐藤（事務局・黒石）

6. 1月 「授業実践・教育課程」についての状況実態調査

担当：佐藤（事務局・黒石）

7. 3月 会計監査

担当：松尾（八戸北）

研 究 テ ー マ

| 紀 要 (集) | 年 度 | 研 究 テ ー マ | 会 場 | 会員数 (一・二 希望計) | 大 会 参加数 | 大会発 表者数 |
|---------------|--------|--|---------------------------|---------------------|------------|------------|
| 50 | 17 | ○豊かな情操を育むために | 八 戸 北 高 校 ガラス工房スターブリッジ | 34 | 21 | 1 |
| 51 | 18 | ○豊かな情操を育むために | 青森戸山高校 ゆ〜さ浅虫 | 31 | 23 | 2 |
| 52 | 19 | ○豊かな情操を育てるために | 弘前市伝統産業会館 弘前市観光館 | 30 | 22 | 0 |
| 53 | 20 | ○豊かな情操を育てるために | 十和田市現代美術館 | 31 | 21 | 1 |
| 54 | 21 | ○豊かな情操を育むために | 青森戸山高校 | 30 | 21 | 1 |
| 55 | 22 | ○豊かな情操を育むために | 黒石商業高校 | 32 | 20 | 1 |
| 56 | 23 | ○豊かな情操を育むために | 八戸ポータルミュージアムはっち | 29 | 18 | 2 |
| 57 | 24 | ○豊かな情操を育むために | 青森戸山高校 国際芸術センター青森 | 28 | 22 | 2 |
| 58 | 25 | ○豊かな情操を育むために | 弘前実業高校 | 30 | 22 | 2 |
| 59 | 26 | ○豊かな情操を育むために | 八 戸 高 校 | 31 | 18 | 1 |
| 60 | 27 | ○豊かな情操を育むために | 弘前工業高校 | 27 | 16 | 3 |
| 61 | 28 | ○豊かな情操を育むために | 八 戸 高 校 | 27 | 15 | 2 |
| 62 | 29 | ○豊かな情操を育むために | 青森県総合社会教育 センター | 29 | 20 | 2 |
| 63 | 30 | ○美術，工芸の教科性を確立するために ～感覚を開く授業とは～ | 弘前市立観光館 | 28 | 17 | 3 |
| 64 | R 1 | ○美術教育と美術館教育について | 八 戸 高 校 | 28 | 17 | 3 |
| - | 2 | (新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止) | | 30 | | |
| 65 | 3 | ○造形的な見方・考え方を深める授業とは | 弘前市立観光館 | 29 | 17 | 2 |
| 66 | 4 | ○人とまちを育む，みんなの美術館 ～美術教育に今できること～ | 八 戸 市 美 術 館 | 29 | 16 | 2 |
| 67 | 5 | ○未来の美術教育の可能性について ～ I C T を活用した授業実践～ | 青 森 西 高 校 | 27 | 19 | 2 |
| 68 | 6 | ○ポストゆとり世代の美術教育 | 弘前工業高校 | 28 | 17 | 2 |
| 69 | 7 | ○地域に根ざした文化活動を目指して | 八 戸 市 美 術 館 | 26 | 15 | 2 |

令和7年度 美術工芸部会